

日本統計学会会報

No.105 / 2000.9.10

発行-----日本統計学会

〒106-8569 港区南麻布 4-6-7 統計数理研究所内

Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924

編集責任—小西貞則 (理事長) / 伊藤聡 (庶務理事)

渡辺美智子 (広報理事) / 瀬尾隆 (広報理事)

振替口座--00190-2-61361

銀行口座--第一勧業銀行広尾支店普通 1092212 番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆：「評価と尺度」・・・ 馬場 康維
2. 新理事長就任挨拶・・・小西 貞則
3. 前理事長退任挨拶・・・杉山 高一
4. 第5回日本統計学会賞
受賞者のことば：浅野 長一郎
竹内 啓
村上 征勝
5. 新名誉会員の紹介
6. 後藤正夫先生を偲んで・・・工藤 弘安
7. 会長候補者推薦のお願い
8. 国立情報学研究所「電子図書館サービス」への参加について
9. 研究部会新設公募のお知らせ
10. 第68回日本統計学会大会(北海道大会)
-プログラム編成担当理事報告- 村上 征勝
11. 第69回大会のお知らせ
11.1 日程・場所
11.2 大会共通テーマの募集
12. シリーズ：統計学の現状と今後
12.1 「コンピュータ vs 統計家」・・・ 椿 広計
- 12.2 「WWWによる統計科学情報の共有」宿久 洋
13. 海外研修記
13.1 アイルランド便り・・・丸山久美子
13.2 プリンストン大学滞在記・・・門間麻紀
14. 日本学会会議関係... 吉村 功
14.1 第18期日本学会会議会員について
14.2 会議報告... 吉村功
15. 博士論文・修士論文の紹介
16. 2000・2001年度評議員選挙結果・・・栗木哲
17. 第68回日本統計学会総会
17.1 日本統計学会2000年度(第68回)総会報告
17.2 1999年度事業報告(1999.4.1~2000.3.31)
17.3 2000年度事業計画(2000.4.1~2001.3.31)
18. 理事会報告(第10回・第11回・第12回)
19. 会合案内
19.1 科研費『統計科学』基盤研究(A)によるシンポジウムのお知らせ
19.2 その他の会議案内
20. 事務局から

1 巻頭随筆 評価と尺度

馬場 康維 (統計数理研究所)

韓国のテジョン(大田)市で昨年9月16日,17日に開かれた韓国統計庁と韓国統計学会共催の国際統計フォーラム(International Statistical Forum)のため韓国を訪問する機会を得た。このフォーラムはアジアの各国およびOECDやESCAPなどの機関から招待された官庁統計関係者と研究者の集いで,主題は新ミレニアムに向けてのアジア地域の統計関係者の協力についてであった。日本からの参加者は統計局の井上達夫局長と福井武弘国政統計課長,本学会会長の三浦由己駿河台大学教授,田中豊岡山大学教授,私の5人である。この会議については三浦会長が会報 No.102

で報告されているのでご存じの方も多いであろう。

テジョンは韓国の首都ソウルの南方150kmに位置しており,1993年に大田 EXPO93が開かれたところで,韓国の第二首都として官公庁や研究機関の移転,工業団地の造成が進められ現在は人口150万人規模の大都市である。日本を出発する前は,筑波学園都市のようなところを想像していたが,想像よりもはるかに規模の大きな都市であった。空港からの高速バスで山間の道路を通り市内に降りていくと初めに目に付いたのは,高級住宅で,沿道にしゃれたレストランが見えた。空港から同行の韓国統計庁のスタッフによれ

ば、テジョンは温泉が出るとのことで、リゾート地としても栄えているようでもあった。

この会議が終わり、翌日はソウルへの移動日で、団体で移動することになっていたが、岡山大学の元留学生たちの親切なお誘いがあり、田中教授とともに、参加者団体とは離れ、テジョン市にある ETRI(Electronics and Telecommunications Research Institute) と KAIST(Korea Advanced Institute of Science and Technology)を見学した。日本に留学していた ETRI の金鉉彬博士の案内である。KAIST には ETRI のブランチがある。ここは、情報工学を中心とする理科系のエリート養成の大学院大学で、高校を飛び級でクリアしてきた秀才達が入学してくる上に、ここでも飛び級があるので、20 歳代前半で学位がとれるとのことである。日本語が必須であるため日本語講座が開講されているとのことであった。ここでは、ロボティクス研究の Jong-Hwan Kim 教授の研究室を訪問した。教授はロボットサッカーの FIRA(Federation of International Robot-soccer Association) を主催して、第 1 回はブラジルで開催したとのことである。ETRI の金博士のセクションにはこの大学院出身の研究員がいて、そのために彼のセクションは一番業績を挙げたとのことである。ETRI は国立の研究機関で、日本の NTT のような所である。見学した研究室は、カラーイメージ研究グループ、バーチャルリアリティ研究グループなどである。非常に若いスタッフたちが活動的に研究に取り組んでいる様子が見て取れた。

この研究所の研究成果の評価の話がとりわけ興味深い。ETRI では以前は、論文数が評価の対象になっていた。引用数も参考にしていただようである。しかし、最近では、その研究成果を利用した企業がどれだけ利益を受けたかということの評価の対象に改めたということである。この研究所では競争が激しいので、ストレスが多いためか、大学に転出する研究員が多いということであった。「研究成果を利用した企業がどれだけ利益を受けたか」を評価の尺度とする、これは、面白い評価法である。尺度は客観性がありしかも分かり易い。論文の数を問題にしないのは、ETRI に要求されている研究は実用性のある研究であり、論文の数が多或少ないが問題ではないということのようである。少し極端な気もするが、これはこれで一つの見識であろう。

このような話が引き金になり評価について考えてみた。近年、研究者の評価、研究の評価、研究組織の評価等、評価が話題になる。先日も、大学において研究面の評価をしていると教育がおろそかになるから教育をしっかりとやっているかどうかを外部評価する必要があるとの政府高官の談話があったというニュースを目にしたばかりである。

さて、上記のような評価基準は研究成果が即座に企業活動に結びつくような研究の分野では的を得た基準であろう。しかし、この評価尺度は、「基礎的な故に儲からない研究」の評価には当てはまらない。また、長い間かかってじわじわと影響を与えて行くような研究成果の評価にも適しない。実際、金博士の話では、面白い研究をしていても企業が興味を持たないような研究をしている人は評価されていないというようなお話であった。

「評価」について言えば、いつも疑問に思うことがある。大学教員の募集要項を見ると、多くの場合、研究業績が要求されているようである。学生を教育するという観点からすると、応募者の資質として必要なものは学生の教育に適しているかどうかであり、研究能力ではないはずなのに、研究業績が問題にされる。担当教科の専門家であることの証に研究業績を用いていると解釈すれば理解できるのであるが、そうすると、研究業績の多寡は教員選考の際の尺度になるのだろうか。こういう評価の問題は、大学院か学部学生かというように教育の対象によっても変わるものであるし、研究者としての評価にどれだけのウエイトがあるかによっても異なるものであろう。

定性的な議論を避け、公正に、客観的に研究者の評価しようとする、評価の尺度として何らかの数量表現が要求される。論文数はその代表である。あるいは、サイテーションインデックスなどもその例である。論文の多寡は研究の質の良し悪しを必ずしも表現していない、という憾みが残る。また、サイテーションインデックスも然りである。同業者の多い分野の論文は引用が多く、同業者の少ない分野の論文は引用が少なくなることは明白である。仲間内での比較には有効かもしれないが、異なる分野の比較には向いていない。さらに、ポジティブな引用もネガティブな引用も同様にカウントされる。いずれにせよ、数は評価の尺度の一つになりうるが、絶対的なものではない。

数を頼みにする評価は、質の評価がきわめて主観的で、評価をする人によって異なるということから来ているのではないか。本物の研究を見分けるだけの眼力を持つ人々が評価を行うのであれば、質的な評価ができるはずであるが、それだけの自信を持っていないところに数を尺度とする見かけ上の客観性が幅を利かすことになるような気がする。

思いつくままに評価にまつわることを述べると際限がない。大学の評価、研究機関の評価、研究者、あるいはマネージャーとしての評価、いずれにせよ、これらは、単一の評価尺度では表せないものであろう。数量にたよる評価から離れて色々な尺度を考えてみてはどうだろうかというのが筆者の主張である。

良い研究、生き生きとした研究は、我々の知的好奇心を刺激し、それに関わる研究者のみならず周りの人々も幸せにする。一方、評価をクリアーするための研究は、息苦しい。そう感じるのは筆者だけであろうか。せっせと数を増やす人がいれば、それを後から勉強しなければならぬ人も増える。本当の楽しい研究をする時間より、意味のない情報を検討する時間の方が多くなると、研究の方向も見えなくなってしまう。評価をすることを少し緩めて、10年に1度でいいから、良い論文を出せばあとは何をしても目くじらをたてないというようなおおらかな評価がゆるされるなら良いのだが。

2 新理事長就任挨拶

小西 貞則

平成 12 年 7 月 26 日に開催されました 2000 年・2001 年度評議員会におきまして、杉山高一理事長の後任として思いもかけず理事長に選任されました。南の九州から北の北海道へ来て、このような大役をお引き受けすることになるうとは夢にも思いませんでした。

最近、インターネット上で、様々な分野の研究活動、各種シンポジウムの内容等を容易に見ることができるようになりました。そこでは、コンピュータを駆使した新しい統計手法が用いられ、併せて種々の統計的問題を投げかけているように思われます。このように、科学の諸分野から提示される新たな問題の解決に向けて、統計学界として積極的に取り組む必要があります。

現在、日本の大学には、改革の潮流が容赦なく押し寄せています。本学会も大きな転換期に差し掛かっていることは否定できません。これから、来るべき 21 世紀に向けて新しい学会の在り方を皆様と共に考えていきたいと思えます。

ぜひ会員の皆様方の忌憚のないご意見をお寄せいただけたらと存じます。

(E-mail : konishi@math.kyushu-u.ac.jp)

どうぞよろしくお願い申し上げます。

理事長略歴: 1972 年広島大学理学部数学科卒業、1974 年広島大学大学院理学研究科修士課程修了、理博。

1974 年広島大学理学部助手、1980 年文部省統計数理研究所研究員を経て、

1994 年より九州大学大学院数理学研究科教授、現在に至る。

研究分野: 多変量解析、ブートストラップ法、情報量規準、非線形モデリングなどの研究に従事。

3 前理事長退任挨拶

杉山 高一

中央大学理工学部で第 66 回日本統計学会大会を行ったのは 1998 年 7 月でした。大会担当理事は鎌倉稔

成先生でしたが、渡辺則生先生と二人で綿密に準備した大会運営も大成功で、800 冊の予稿集が売り切れる

程の盛況でした。そのような中、私は評議員会で理事長に選ばれました。

私の前任者の山本拓理事長はたいへん有能で、人柄のよい立派な方でした。私は先生のもとで渉外担当理事をしていましたが、連絡一つにしても適切でとても丁寧でした。その後、先生は一橋大学経済学部の学部長かつ研究科長に選ばれたと聞いて、なるほどと思ったものです。名誉ある日本統計学会の発展のために、前理事会と同程度の水準を保ち、理事会を運営していくには何をなすべきか、これが私の最初の課題でした。考えた末の結論は、優れた先生方に理事になっていただくことでした。これは正解であったと思っています。

字数の制限もあり、一言ずつですが理事の先生方のされた仕事を、以下に書くことにいたします。

編集担当理事の小西貞則先生と佃良彦先生は、会誌の水準のより一層の向上と充実に、また国際化にも務めて下さいました。佃先生には、統計学会賞のお世話までしていただきました。

村上征勝先生はプログラム編成理事として、大会を魅力的なものにするために努力し、能力を発揮してくれました。

チュートリアル・セミナーの企画は難しく、この課題に取り組んでくれたのが永田靖先生でした。先生の企画力により、どのセミナーも評判が良く、成功でした。

広報担当理事は久保川達也先生、鎌倉稔成先生、渡辺美智子先生で、幹事に渡辺則生先生に加わっていただき、会報の編集とホームページの管理をしていただきました。シリーズ『統計学の現状と今後』をはじめとして、興味深い記事をたくさん掲載してくれました。依頼原稿が入らなかつたりして、期限付きで会報を作るのはたいへんなことですが、時間をかけて読み応えのある良いものを編集してくれました。

国友直人先生は、広報担当で大会校を決める仕事、経済連合会の仕事等をしていただきました。また、私に万一のことが生じたときの代理を念頭において、理事にお願いしました。国友先生が決められた大会校は、北大と来年度の西南学院大で、どちらも魅力的な大学です。他にも、補助金のこと、学術情報センターのこと、新入会員、賛助会員の勧誘等々の仕事があり、丸山久美子先生、瀬尾隆先生にも、渉外担当理事として働いていただきました。

この理事会から発足した国際関係担当理事は矢島美寛先生で、前例のない難しい仕事に精力的に取り組んでいただきました。期待した以上の成果があげられています。

大会運営担当理事は、岡山理科大学の大会は山本英二先生、北海道大学は橋本智雄先生で、組織委員会を構成し、どちらも有意義な立派な大会でした。

庶務会計担当理事は激務で、実に多くの仕事があります。

定期的な仕事をこなしながら、樋口知之先生は学会のIT化に努めて下さいました。これは大会の申込みだけでなく、理事同志の連絡や意見交換でも威力を発揮しました。柏木宜久先生は、統計学会の慣行等を熟知して、1年目の伊藤聡先生と協力して理事会等の運営を円滑に進めてくれました。先生方は3、4時間にわたる理事会をはじめ、評議員会、総会の議事録の作成もして下さいました。これは神経を使い、しかも時間のかかる仕事です。伊藤聡先生は、これから二年目に入りますが本当にご苦労様です。

二年目に中野純司先生が広報担当として加わり、自前のサーバの購入と、IT環境の整備に尽力して下さいました。さらに、渡辺美智子先生、幹事として井上達紀先生、門間麻紀先生、宿久洋先生が加わり、5人の先生方でシステムの構築やホームページの充実に努めていただきました。

たいへん優秀な先生方が理事・幹事の仕事を引き受け下さり、実に良い仕事をして下さいました。先生方には感謝の気持ちで一杯です。私の場合、理事長に選ばれてから理事を決めるまでの時間が極めて短く、しばらくたってみると、あの先生にも加わっていただいたらよかったと思うことが多々ありました。実際に統計学会は人材のたいへん豊富なところですよ。皆さんはここまで読まれて理事長は何をしたのかと疑問を持たれることでしょう。私も書いて同じように思いました。有能な先生を見出して、理事・幹事の仕事をお願いしたことだけかもしれません。

会長の三浦由己先生には理事会に御出席下さり、多くの価値あるご意見をいただきました。理事会がなごやかで良い雰囲気だったのは、私達皆が尊敬する立派な先生がいつもおられたからであると思っています。ありがとうございました。

最後に理事会の種々の慣行や運営についていろいろ

ると御指導いただいた前理事長の山本拓先生,前会長の杉浦成昭先生に感謝いたします。

新理事長の小西貞則先生に対しても皆様のこれま

で通りの御支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

4 第5回統計学会賞

4.1 第5回統計学会賞

「日本統計学会賞」の第5回受賞者は,五十音順に,

浅野 長一郎(九州大学名誉教授)

竹内 啓(東京大学名誉教授)

村上 征勝(統計数理研究所)

の方々に決定しました。受賞者の皆様には,北海道大学で開催された日本統計学会第68回大会において,三浦由己会長からそれぞれ賞状と副賞の時計が贈呈されました。受賞された3名の方々の受賞理由と略歴,業績は以下の通りです。

[1]受賞者: 浅野 長一郎氏

略歴: 1927年生,九州大学理学部卒業,1973年九州大学理学部教授,1991年創価大学工学部教授。九州大学名誉教授。

受賞理由: 多年にわたり医療統計及び計算機統計の研究に従事し,大きな貢献をした。特に,国内外でこれらの分野に係わる研究プロジェクトを意欲的に組織し牽引役を努めた。

業績: 『因子分析法通論』,共立出版(株),(1971). “Bayesian estimation methods for categorical data with misclassification”, *Common.Statist.-Theory Meth.*, Vo.18, No.8, pp.2935-2954, Co-author Z. Geng, (1989).

[2]受賞者: 竹内 啓氏

略歴: 1933年生,東京大学経済学部卒業,1975年東京大学経済学部教授,1994年明治学院大学教授。東京大学名誉教授。

受賞理由: 統計的推定における漸近理論をはじめ数理統計学の理論研究全般に渡り多大な貢献をし

た。また計量経済学の研究,統計審議会委員等を通じて日本の統計制度の整備・改善に寄与した。

業績: 『数理統計学』,東洋経済新報社,(1963). “Asymptotic Efficiency of Statistical Estimator: Concepts and Higher Order Asymptotic Efficiency”, *Lecture Notes in Statistics Vol7*, Springer, Co-author M. Akahira, (1981).

[3]受賞者: 村上 征勝氏

略歴: 1945年生,北海道大学工学部卒業,1982年文部省統計数理研究所研究室長,1994年同教授。

受賞理由: 統計学の手法を人文科学の分野に導入し,計量文献学及び情報考古学という新たな分野の開拓に多大な貢献をした。また数々の歴史的に重要な文献をデータ・ベース化し広く公開することにより,一般の利用に供した。

業績: “A Comparison of the Value of Information in 2-state 2-action Statistical Decision Problem”, *Statistical Theory and Data Analysis*, North Holland, (1985).

『真贋の科学-計量考古学入門』,朝倉書店,(1994).

4.2 受賞者のことば

[1] 受賞のことば 浅野長一郎

このたび思い掛けず,学会賞を頂くことになり,驚き恐縮している。先ず,関係各位の御厚情と御努力の賜物と衷心より感謝申し上げたい。受賞理由が計算機統計学にも関する仕事のようなので,次に若干の回顧と将来について所感を記してみたい。

いまさら情報化社会を標榜するまでもなく,今日の産・学・官のあらゆる分野で,人文社会や自然現象の分析に,コンピュータの利用は不可欠になって

いる。本来、統計学自体の目的は、1834年の英国王室統計協会の設立理由によると、諸科学に協力支援し、事実の収集・整理・分析・要約に基づく現象の説明と公刊にあった。米国統計協会は1839年に設立され、ちなみに、日本統計学会は1931年に設立された。その後、1950年当初からのコンピュータとその周辺システムの進展は目覚ましく、現在、この活用がなくて上記の統計学への期待は昔話に過ぎない。この時代展開によって、データ入力に始まる科学的データ処理とデータ分析による統計的考察の必要性は、益々情報化社会において強まっている。

このような起源から、当初の計算機統計学わかり易い課題は、統計プログラム・パッケージの具現化であった(1960)。DixonらのBMD初版(1961)・OSIRIS(1964)等が引例される。私等もIBM 650でFORTRANSIT言語での系統的SPP構築が初期の開拓(1952-64)であり、当時、既にDixonやClyde等とも交流があった。1960年代後半には欧米各地で数多くのSPPが開発され、データへの適用面だけでなく、統計学の研究と教育や数値計算アルゴリズムにも有力な道具として位置付けられきた。ちなみに、私が塩野義製薬に解析センターを創設したのは、米国東岸の大学の招待研究から帰国した1963年であった。1970年には、BMD X-series・SPSS・OSIRIS-IIが発表、同時にデータ・ベースやデータ・バンクの論議も盛んになった。1972年に米国統計学会で統計計算部会が設定され、その直後1973年の第39回ISI(Wien)で部会が組織された。この1973年に、私は九大理学部情報研に転じた。1974年に欧州で第1回のCOMPSTATもWienで開催された。また、1975年のISI(Warsaw)では東欧社会主義国も加わり、官庁統計に関するデータ・バンクやSPPに関する種々の発表がなされた。この当時、Francis等の統計プログラムパッケージの評価と国際比較に関するIASC論文(1977)や成書(N.Holland,1981)は国際的に大きな影響を与えた。また、1978年には、わが国における独創的な大学間組織による文部省科研費・総合研究や試験研究等によるNISANシステムの発表が国内外で行われ、さらに1981年の日本統計学会50周年記念の国際円卓会議では、わが国初の電算機統計学部会が開催された。日本計算機統計学

会(JSCS)は1986年に創立され、同年10月に第1回の学会が大阪で開催され、他方、日本統計学会でも毎回セッションとして活発な研究が促進され今日に至っている。

統計学の寄与として、自然に当初のSPPの研究開発の記述が中心になったが、電算機の援用による社会的・学術的寄与の面では、1983年当時の日本統計学会で、すでに老人病と老人医療・入試統計と教育評価・人口問題・環境汚染と疾患問題・国民経済と生産性・物価指数・労働力問題・時系列経済分析・社会調査・文献情報処理方式・食物と住宅の需給調査や数理統計学に関する研究等、実に現在の課題とも云える広範な論題が提示されている。その先見性ととともに、その後の多年に亘る進展と寄与が伺える。これらの課題では、実際に社会・学術面の実証的寄与が大きく、斯界の研究開発の主流として継続活用されている。発想が良くても、短期間では不十分で徹底にも限度が生じ、折角の提言も無に帰してしまふ。今後とも、成果が国内・外で長く引用される先進性と主導性に期待したい。

ここで回顧から転じ、私達がとり組んでいる現在の一重要課題に関して記したい。それは現在のインターネットが極めて重要な役割を果たす時代に拡大しつつあることである。これに関しては日本統計学会でも研究部会を組織し、グループによる研究活動を始めている課題でもある。そこでは少なくとも、(1)DLLSA班:統計解析のためのDLL(Dynamic Link Library)の構築、(2)ITLS班:Webを利用した統計学習用双方向テキスト、(3)EBSA班:統計科学のための書籍電子化、の3班が徐々ではあるが、欧米の研究者とも交流しつつ仕事を進めている。何れも、将来に備え、インターネット上で、(1)は統計ソフトウェアの構築、(2)は統計教育の方式、(3)は稀少価値ある邦文図書の備蓄である。統計の研究者と応用家は、勤務先や在宅で居ながら、即ち外出も探索も帯出も必要なく、何時・何処でも接し得る絶大な便宜を生み出すことが出来る。これらは統計学・統計科学の勉強・啓蒙・研究に必要な不可欠なライフラインとして新知識や研究動向を汲みとる源泉と云え、重要な今後の科研費課題であろう。これらに将来を夢見つつ私もNISANシステムの面から手伝って応援している。

[2] 受賞のことは 竹内 啓

日本統計学会賞を頂き光栄に存じます。このことについて御尽力下さった方々にお礼を申し上げます。

私が統計学の勉強を始めた 1955 年ごろは、日本では増山元三郎先生、北川敏男先生の導入された Fisher-Neyman 流の推計学、あるいは推測統計学がようやく本格的に研究され、また工業における品質管理や、農業における実験計画法、あるいは官庁統計における標本調査法も根付き始めた頃でした。数理統計理論や実験計画法、あるいは標本調査法などを体系的に解説した書物も主としてアメリカで出版されるようになっていました。John-Wiley のシリーズが主要なものを大部分ふくんでいたと思います。

私は 1956 年に大学院の統計学専攻コースに入りましたが、そこで増山元三郎先生、森口繁一先生、宮沢光一先生らの指導を受けることができただけでなく、大学外で PSG (確率統計グループ) に参加し、サマーセミナーなどを通じて他大学ばかりでなく、工場や官庁におられた方々もふくめて、理論家や現場におられる多くの方々と近づくことができたことは、大変幸せだったと思っています。その方々は大部分私よりは年長でしたが、今から見れば 30 代、20 代の極めて若い方々であり、当時はまだ日本にとっては新しい分野である統計理論研究や統計的方法の応用に意欲を持って取り組まれました。その中から私は「統計学あるいは統計的方法」というもののあり方について多くのことを学ぶことができたと思っています。

その後 40 年以上たちましたが、その当時からの知り合いの方々が大部分まだお元気でご活躍しておられるのは心強いことです。

この 50 年の間に日本の統計学もすっかり定着し、私達より若い世代の統計学者も、もはや学界の中心的存在として活躍されるようになりました。この間日本の学界の水準はアメリカ、ヨーロッパ、あるいはインドなどと比べても決して見劣りのしないところに達していると思います。また応用面でも品質管理をはじめとして優れた成果が生まれてきました。

しかし学問そのものの内容について見ると、1980 年ごろから統計学は、とくに数理統計学の理論面ではいわば「成熟段階」に達しているように思われます。つまり今までの理論の枠組みの中では新しい理論的成果が生まれ難い状況になっているように思われます。そのことは統計学の価値が下がったことを意味するわけではありません。多くの学問的、あるいは技術的な応用分野では、依然として統計的方法は不可欠な道具となっています。また新しい応用分野も次々と拓かれつつあり、そこからはこれまでの方ではうまく解くことのできない新しい問題も生まれています。けれどもそこから新しい方法や新しい理論が生まれるにはいたっていないことが問題だと思います。最近出版される統計学の本の多くは、与えられた状況に対してアド・ホックなモデルを作って思いつきの手法を適用し、何となく結論を出しているようで、どうもすっきりした感じのしないものが多いように思われます。こんなことを感じるのはいは私の偏見かもしれませんが、しかしどうもモデルの作り方や、解を求める手法に必然性が感じられないのです。やはり思い切った発想の転換が要求されているのではないのでしょうか。それを若い世代の人々に期待したいと思います。

その際外国や先人の研究から学ぶ必要があることはもちろんですが、しかし考え方の上で外国の二流、三流の学者の後を追うことはやめた方がよいと思います。むしろ与えられた問題に対して、それをどのように完成化したらよいか、それに対してどのような方向から解を導いたらよいかを自分で考えることが大切です。

と同時に、先人の研究を受け継ぐことも大切だと思います。何十年も前に書かれた論文の中に、その後忘れられてしまった案外に重要な結果が示されていることが時々あります。学問的関心の方向が変わると、今まであまり興味を持たなかった結果が改めて意味を持って見直されることも少なくないと思います。

改めていうまでもないことですが、統計学は、その応用と切り離すことができません。統計理論、応用統計、制度としての統計(官庁統計)の三分野が密接に関連して発展することが大切です。それぞれの分野に関わる統計学に係る学会は日

本でも数多くありますが、やはり同時に全体を展望してバランスの取れた発展をはかる組織も必要であり、ISI や ASA のような統合学会の存在も重要です。日本ではやはり日本統計学会にその役割が期待されていると思います。私自身の書いた統計学に関する論文や著書はほとんど理論的なものばかりでしたが、若い頃から応用面や制度面についても専門家の方々と絶えずコミュニケーションを持ちつづけることができたことは幸せでした。

日本の統計学および日本統計学会の 21 世紀へ向けて一層の発展を祈念いたします。

[3] 受賞のことは 村上 征勝

機械設計の研究で必要となった統計学を、自らの専門にするようになってから 26 年です。この間にデータ解析の対象は工学から人文学へと変わりましたが、データ解析に基づく新たな知見の獲得が人文学や統計学の発展につながると思い、計量文献学、情報考古学等の統計学の応用分野の開拓を試みてまいりました。

しかし、私自身はこのような仕事が人文学や統計学の発展にどれだけ寄与したのか全く自信がありません。それにもかかわらず、この度日本統計学

会賞という栄誉ある賞を、母校の北大での大会でいただきましたことに、大変感激しております。と同時に、秀でた業績をあげておられる多くの会員の方に対し、誠に申し訳ない気持ちで一杯です。

ただ今回の賞は、「もっともっと努力せよ」という叱咤激励の賞であると認識し、ありがたくお受け致しました。

非才な私が今日まで研究を続けることができたのも、統計学会の諸先輩、同僚、後輩の方々、それに、『日蓮遺文』、『源氏物語』、『サンスクリット大典仏典』等の文献の計量分析や、私が「机上での発掘」と呼んでいる考古学データの計量分析等で、これまで一緒に研究をさせていただいた人文学の研究者の方々のおかげと深く感謝しております。

フロンティア精神というには誠におこがましいのですが、統計手法の新たな応用領域の開拓により一層努力致したいと思います。

今後とも皆様のご指導、ご支援よろしくお願い致します。

5 新名誉会員の紹介

第 5 回の評議員会（北海道大学）において、右の 3 名の方が名誉会員として推挙され、第 68 回総会において承認されましたので、ご紹介いたします。

■ 工藤 昭夫 会員（九州大学名誉教授）

40 年間に渡り九州大学理学部に勤務され、その間、多変量統計解析、回帰分析、人類遺伝学、医学統計学等の分野で数多くの業績を示し、同時に 21 名の理学博士と 29 名の理学修士を育成されるなど、統計学の研究と教育・普及に貢献された。

■ 鈴木 雪夫 会員（東京大学名誉教授）

ベイズ流統計的決定理論に関して理論と応用の両面で優れた業績を挙げられ、わが国のベイズ流統計学の研究水準を高められると同時に、昭和 47 年

から昭和 49 年にかけて日本統計学会の初代理事長として学会運営に貢献された。また、文部省、厚生省など政府の審議会活動を通じて統計学の発展に多大に寄与された。

■ 牧野 都治 会員

オペレーションズ・リサーチの側面から統計学の発展的研究に関して多くの業績を挙げられると同時に、統計数理研究所室長、茨城大学教授、東京理科大学教授を歴任されると同時に、総理府統計職員養成所、国際電電（株）研究所、他多くの大学・研究所等で、多数の統計学研究者の育成・指導に当たられ、統計学会の発展に寄与された。

6 後藤正夫先生を偲んで

本学会会員後藤正夫先生には、本年1月29日心不全のため逝去された。享年86歳であった。官界から学会、政界にまでわたる先生のご活躍とご功績の全貌を記すことは、筆者の到底及ぶところではない。ここではかつて先生にお仕えしたことのある者の一人として、統計に関連する先生のご略歴を記し、ご業績をたたえ、ご冥福をお祈り申し上げる。

先生は大正2年大分県でお生まれになり、昭和12年横浜高等工業学校電気化学科をご卒業、三菱鉱業を経て官界に転じ、21年に宮城県秘書課長兼調査課長に就任された。これが官庁統計の分野での先生のご活躍の始まりであったと思う。その後昭和24年に中央官界に転出、戦後21年に設置された統計委員会事務局の基準課長、審査課長を歴任し、27年統計委員会の組織替えに伴い、行政管理庁統計基準部統計企画課長に就任された。

統計委員会の設立の直前、GHQの要請によってアメリカ陸軍省からライス博士を団長とする統計使節団が派遣されたが、その団員の一人にデミング博士がいた。博士の主な任務は我が国の官庁統計における標本調査の導入であったが、また産業における統計的品質管理の重要性を説いておられた。後藤先生は当初からこの品質管理に関心を持たれ、その手法の普及に博士とともども尽力され、昭和27年にはデミング賞を受賞された。

昭和34年には統計基準局長の要職に着かれ、以後42年にいたるまで、我が国の統計行政を総合統制する責任者として、この8年間が官庁統計の分野で先生がもっとも輝かしいご功績を残された期間であった。昭和35年には国民所得倍増計画が発足し、経済の高度成長に突入したが、それとともに官庁統計の整備も著しく進展し、39年には各種基礎統計の集大成ともいえる産業連関表の基本表が、各省庁の共同作業の成果として行政管理庁から公表された。

この時期はまた統計の国際協力の分野でも著しい発展がみられ、昭和35年にはISIの第32回総会が東京で開催され、先生は総会の招致と運営に貢献された。ISIとの関係では、昭和38年オタワでの総会および40年ベオグラードでの総会で、先生は我が

工藤 弘安(全国統計協会連合会副会長)

国の統計に関する論文を発表された。他方、我が国は36年に国際連合統計委員会の委員国として初めて当選し、先生は故森田優三先生の後を受けて、41年の会期に日本代表委員として参加された。昭和39年に我が国はOECDに加盟したが、OECDの要求したほとんどすべての統計を統計基準局から発信することができたのは、当時の我が国の官庁統計がすでに国際水準に到達していたことを物語っている。

他方我が国の官民における電子計算機の導入は、昭和35年頃から急速に進展したが、先生はその豊富な技術経験とともに、中央地方の官庁統計部局における電子計算機の導入に貢献された。先生はまたアメリカで戦時中に発展したORに関心を持たれ、統計的品質管理とともにORについてもその普及に尽力されていたが、そのご功績のゆえに昭和53年に日本オペレーションズリサーチ学会賞を受賞された。

退官後は昭和43年に郷里の大分大学学長に就任、以後8年間大学の管理業務に専念され、大分大学工学部の新設、また大分医科大学創設準備大学学長として、同大学の創設に貢献された。大分大学退官後は東海大学客員教授を勤められ、51年に参議院議員に当選、平成2年までの14年間を政界で活躍され、平成元年には法務大臣に任命された。この間、59年には(財)全国統計協会連合会会長に就任されている。

先生は誰とでも気さくにお話を交わされたが、そのお話は該博な知識に裏付けされた機知に富んだお話で、常に聞く人を魅了した。話が興に入ると、やおら胸に手を入れて名刺入れを取り出された。そこには先生が昭和36年にベルギーに出張された折、お一人でアドルフ・ケトレーの生家のあるガントの町を訪ねられ、ご自身で撮影されたケトレーのレリーフの写真が収められていた。このことについては先生ご自身のお言葉を次に引用させていただいて、追悼の文を終えることとする。“私はケトレーには遠く遠く及ばないにしても、少しでもこのケトレーにあやかりたいということを願っていたしながら、今日までこの写真を胸に仕事をいたしているのです。”

7 会長候補者推薦のお願い

本年秋には次期会長（2001・2002年）の選挙が行われます

本学会では、会長候補者を会員から推薦していただくことになっております。この趣旨は、一般の会員の参加意識を高めることにあり、1996年9月の評議員会で以下の内容が確認されております。

「評議員会での会長候補者の選出に先立ち、会報等により会員に候補者の推薦を求める。推薦は、本人の了解のもとに推薦理由書および略歴、簡単な業績リスト等の資料を添えて評議員会に対して行うものとする。評議員会は、推薦された候補者を参考にして、従来どおり会長候補者1名を選出し、会員に信任投票を求めるものとする。」

次期の会長選挙への会員からの推薦を以下の手順で受け付けます。

1. 推薦の資格は、正会員、名誉会員、高齢特別会員とし、同一の候補者を複数の会員が連名で推薦することも可能です。

2. 今回の会長選挙のためには、2000年10月31日までに、所定の書式による推薦書類を事務局宛てに提出することが必要です。郵送可。ただし、署名、捺印が必要ですので、FAX等の通信は不可とします。
3. 所定の「会長候補者推薦書」は、事務局へご請求ください。推薦理由書（A4用紙1枚）、履歴書（A4用紙1枚）、業績リスト（A4用紙2枚以内）は、書式自由です。

多くの会員の皆様から推薦をいただけることが前提ですので、積極的にご推薦くださるようお願いいたします。

8 国立情報学研究所「電子図書館サービス」の参加について

平成12年4月に学術情報センターに代わって設置された大学共同利用機関(文部省)である国立情報学研究所では、学術雑誌をそのまま電子化し、書誌情報とともに検索できるようにした情報サービス(電子図書館サービス)を行っています。

<http://www.nii.ac.jp/els/els-j.html>

本学会も日本統計学会誌を登録し、論文本文をインターネットで近々閲覧等できるようになることとなりました(利用にあたっては、利用申請が必要です)。

詳細は、公開後、本学会のホームページ

<http://www.jss.gr.jp>

でお知らせする予定です。

9 研究部会新設公募のお知らせ

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまでに多くの研究部会が誕生し、統計学の発展に寄与して参りました。この制度は、公募性をとり、原則として年1ないし2件が評議員会の承認を得て発足します。継続期間は2年間、助成額は1部会につき10万円で、部会設置期間終了時には、会員への研究成果の公表と評議員会への事務報告、研究会の開催に関して本学会のホームページへの掲載が義務付けられています。また、できるだけ統計学会大会において共通テーマのセ

ッションを設けることが奨励されております。募集は毎年行いますので、前年採用された1ないし2部会とあわせて、1年度中に4つから5つの部会が開かれていることとなります。

今年も研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日：2000年10月31日

応募先：日本統計学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所内

なお応募書類の書式などは事務局までお問い合わせください。採用は、11月に開かれる評議員会にて

協議の上、決定いたします。

10 第68回日本統計学会大会（北海道大会） —プログラム編成担当理事報告—

村上 征勝

第68回大会は2000年7月25日（火）～7月28日（金）の4日間にわたり、北海道大学を会場に開催されました。25日の二つのチュートリアル・セミナー（非線形多次元データ解析入門、及び、金融工学と統計分析）に続き、26日からは3日間、4会場で9つの共通テーマを中心に外国人招待講演3件を含めた計231件の研究の報告がありました。

今大会では、一般報告の時間を昨年の15分から一律に20分へと変更しました。そのため、朝9時から夕方6時前後まで各会場で報告が行われるというハードなスケジュールとなりました。また25日の大雨で、D会場が浸水し使用できなくなり、急遽、会場を変更するなどのアクシデントもありましたが、全報告が英語で行われるというセッションなどもあり、昨年にもまして充実した大会となりました。なおチュートリアルセミナー参加者は137名、大会参加者は602名（会員466名、賛助会員4名、非会員127名、招待5名）でした。

第68回大会をこの様な盛況のうちに終えることができましたのも、学会員の皆様、及び、橋本智雄大会

運営理事を始めとする大会組織委員会の黒田重雄、井上久志、園信太郎、長谷川光、古澄英男、柿沢佳秀の北海道大学の各氏のご尽力によるものと心より感謝する次第です。

また、チュートリアル担当理事の永田靖（早稲田大学）、チュートリアルセミナーをオーガナイズして下さった水田正弘（北海道大学）、三浦良造（一橋大学）の両氏、共通テーマをオーガナイズして下さった江口真透（統計数理研究所）、大森裕浩（東京都立大学）、鍵村達夫（日本ベーリンガーインゲルハイム）、竹村彰通（東京大学）、丹後俊郎（国立公衆衛生院）、中野純司（統計数理研究所）、馬場康維（統計数理研究所）、舟喜光一（持田製薬株式会社）、三浦良造（一橋大学）の諸氏及び座長をお引き受け下さった会員の方にもこの紙面を借りてお礼申し上げます。

なお、今回のプログラム編成委員は江口真透（統計数理研究所）、大森裕浩（東京都立大学）、鍵村達夫（日本ベーリンガーインゲルハイム）、中島隆信（慶応義塾大学）、村上征勝（委員長、統計数理研究所）、山口和範（立教大学）の6名でした。

11 第69回大会のお知らせ

11.1 日程・場所

主催校：西南学院大学

場所：西南学院大学（福岡市）

期間：2001年9月1日（土）から4日（火）

の4日間、ただし9月1日（土）はチュートリアルセミナーが予定されております。

* 2001年度には8月下旬にお隣の韓国（ソウル市）にて国際統計協会（ISI）の世界大会が開催されるとともに、日本でも関連した統計学関連の幾つかのサテライト会合が計画されておりますので、来年の

夏には各国から多くの指導的な統計家が韓国・日本に来ることになりそうです。そこで、日本統計学会では統計学に関するこれらの国際的日程をも考慮して研究報告会の開催時期（例年7月下旬）を少し変更して、9月1日-9月4日とし、開催場所を西南学院大学（福岡市）といたしました。

来年度の統計学会大会の日程は例年とは異なりまますので、これから来年にかけて会員の皆様のご予定を立てられる際にはあらかじめご留意いただければ幸いです。（前）渉外担当理事 国友直人

11.2 大会共通テーマの募集

プログラム編成委員会では、2001年9月に西南学院大学で開催される予定の第69回大会における共通

テーマについて検討中です。会員の皆様からのご意見やアイデアを参考にして、統計科学の発展に即した魅力的で充実したものにしたいと考えております。事務局まで積極的にご意見・ご提案をお寄せ下さい。締め切りは10月15日です。

12 シリーズ：統計学の現状と今後

12.1 コンピュータ vs 統計家

小生、統計家を志して25年真打には程遠い修行の身ですが、データを通じて種々の分野の方々と御付き合いさせて頂きました。特に1997年春に、東京教育大学跡地の夜間大学院に転職してからは、ビジネス前線で活躍する方々に鍛えて頂き、マーケティング、金融、会計など、小生にとっては新たなミステリーゾーンを堪能することも出来ました。

まさに、旅人を続けているような気分で、こんな楽しい職業を選ぶ方がもう少し増えて下されば、あちらこちらで不義理を重ね、ご迷惑をかけることもなかうに等と勝手な事を考えていました。実際、インターネット上にテキスト・音声・画像情報が氾濫している現在、普通の人々の生活の中に「情報処理」技術が溶け込む時代が、目前に迫っています。本来「情報との対話を通じた創造」の時代こそ、統計家の夢がバーチャル世界を駆け巡る時代の筈と思っていました。最近、その雲行きが少し怪しくなって、冗談でなく、「夢は枯野を」になるのかと感じたことがあります。ここでは、その経緯と小生なりの不安の解消プロセスを紹介したいと思います。

確かに、情報に付加価値を与えるマネジメント体系としては、統計的方法以外にも、既に多くのアプローチが進出しており、同僚でもある情報工学分野の方々の元気が大変よしい。とにかく、コンピュータの発展と共に技術目的を最適化するツールは、あまりにも良くなりましたので、その中核にある情報科学・情報工学は、予測や決定の技術としての統計的方法を飲み込むのは時間の問題に思えます。奉職する筑波大の社会人大学院でも1999年度博士課程入試で、従来の統計的方法とデータマイニングとの差異が問われました。探索的データ解析とマイニングとを識別できない

椿 広計(筑波大学大学院経営システム科学専攻)

小生には、合格は覚束ないでしょう。マイニングの主要なツールとしての「GAM(一般化加法モデル)」などというレポートを読むと腹も立ちますが、これはやっかみの類でしょう。

そもそも、同時代のユーザーに対して、最新かつ最良のツール(本来は最新のツールは最良であるべきなのですが)を提供し、誤用無く使いこなしてもらうことは、当該分野の技術専門職の責務であり、これを真っ当にこなせないのは問題です。カメラやビデオを進化(製品と利用させる技術の進化)させてきた技術者に比べれば、一般論として統計家のお客様へのサービスの手抜きは明らかなのですが、シェアを失うのは当然のことです。小生も内心では、ライカで芸術的写真をとってくれるような素敵なお客さまばかりが、お客様であって欲しいと期待しているように思えます。残念ながらこの面で、古典的統計家に代わってGAMを宣伝してくださるデータマイナーの方々に、ちょっとばかりの遅れをとってしまいました。その遅れが、IT時代の真っ只中に生息する御用とお急ぎのお客様から、「統計的方法」が「敬遠される(敬意をもって「老舗」に祭り上げる)」要因になったと考えます。

しかしこの問題は、統計業界を適切にマネジメントされる方が出現して、営業に頑張らせればすぐ改善されるでしょうし、無責任に言えば「良いものは良い。その内、何とかなるだろう。」でも構わないように思えます。それ以上にショックだったのは、専攻の講義で、「樹形モデルによる論理構造把握」、「GAMによるパターン構造把握」、「GLIM(一般化線型モデル)による構造数式化」と順次進めて行く解析戦略を称して「仮説成長型データ解析」と呼んで悦に入っていたところ、後日、受講生から「データマイニングのツール

を使えば、講義で演習したことなど一発でしたよ」と言われたことでした。チェスの名人がコンピュータに敗れたのと同じようなものと言うと大げさですが、はさみ将棋の名人が負ける位のショックだとは思いません。

このショックを分析すると一つは、極めて個人的なことです。少なくとも、小生が把握している統計の技術側面が既に時代に追いついていない、小生の統計上の顧客は最新のツールによって得られる成果を享受できていない、もう「現役引退も近いな」そのような心配です。

さて、もう一つのショック、第一のショック以上に深刻だったショックは、とても賢いコンピュータと対峙したとき、専門職としての「統計家」の存在意義はどのようになってゆくと考えるべきかということでした。これに悩んでいる内に、むしろ統計が老舗として守りつづけるべき原則の中に、大いなる価値があるのではないかと思うようになったのだから、我ながら可笑しくなっていました。

問題解決の体系には、「問題の表現方法」、「問題を解くために必要な情報」、「問題の解決方法」という3つの側面があると考えます。この中で後者2つは、それぞれ燃料とエンジンに相当します。真に人間的な側面、すなわちドライバーに相当するのは、問題をデザインする第一のものだと考えています。コンピュータが最も得意とするのは、勿論エンジン部分でしょう。

一方、古典的統計家なるものが問題解決を行うという場合、彼は科学としての統計の3側面についての「家訓」に従っているように思うのです。

- 1) 不確実な現象を説明する妥当なモデル構築の方法論。
- 2) 好ましい確率変数の実現値と見なせるようなデータをどのようにして採取するかについての方法論。
- 3) データをモデルに当てはめ、そのモデルを利用して決定を下すための方法論。

原理・原則たる家訓を認めれば、技術として利用する実用手法は、モデルと目的が与えられれば、自然に導かれます。これは「形(数理的正当化可能な原則)」を持った技芸と言えますし、逆にそれに縛られている側面もあります。この中で第3の側面については、Fisher家の家訓たる尤度原理周辺の数理統計学を良

しとする方も、新たな流儀である決定理論を拠所とする方もいらっしゃるでしょう。応用統計家を目指すならば両者についての一通りの素養は必要でしょうし、統計家とは名乗らない情報技術者でも、この手の数理は結構習熟しているようです。しかし、この部分については、方法論を進展させる「統計学者」は多少必要であっても、「統計家」は、賢いコンピュータに駆逐されるでしょう。

第2の側面は、データを生成する実験計画や調査技術に関わる原則で、これは不幸(幸運?)にも統計家以外の情報技術者が、あまり馴染みの深くない分野です。統計だけが、「データの質」を改善する方法論に気配りしているのが現状です。しかも、これは情報化時代だからこそ世間様から見直していただきたい最大の領域です。本質的に最適化問題ではあるものの、実用化している部分が、十分なランダムネスを前提としているという意味で、第3の側面よりは長いこと熟練した統計家が必要とされる分野でしょう。特に、非標準誤差の問題という統計家と固有技術者とが協業しないと評価できない分野がある限り、「国家安康、君臣豊楽」で、次の世代までは生き残れそうです。

さて、Fisherが統計的推論を「科学的説明」に使い、統計モデルという枠組みにこだわった事は、統計家にとっては感謝すべきことかもしれません。彼の頑固さは、統計的方法を第1ステップである「現象の近似」という客観的部分、第2ステップである「目的の達成」という主観的部分に分離したことに顕著に表れています。これは想像ですがFisherには、第1ステップから抽出可能な「普遍的構造」に、こだわりがあったのではないのでしょうか。現今、ブラックボックス的接近と称する方法の中には、第1ステップと第2ステップを統合して1段階で最適化を行っているものが多くなっているようです。しかし、1段階最適化は、現象の近似には成功しても、その中から「原因因子」の変動を記述する観測状況依存母数を攪乱母数として分離できません。あくまで、状況依存した最適化に成功するだけです。モデルを創造と言うことは、大嘘になる危険はあるかもしれませんが観測データを超えた推論を可能にする「賭け」なのだと思います。何と人間的な知恵でしょうか。

人間にとって幸いなことに、モデルの質的側面はデータから一意に定まるようなものでは有りません。特

に何が原因で何が結果かという事には、専門家の演繹的判断は欠かせません。しかし、統計家はモデリングにとっての有用なヒントは与えられそうです。

例えば、我が国の品質管理の世界では、品質に何が影響を与えているかについての定性的因果分析を徹底して行かせていた（特性要因図、連関図）訳です。一方、最近の「共分散構造分析」のソフトウェアが、モデリングの第一段階で統計ユーザーにさせているのは、潜在変数を含む変数間の因果構造に関する整理です。これらのことはまさに当該分野の専門家たる人間が、必死に考えるべきことに思えます。彼らの整理に統計家が、コンピュータより適切な助言（コンピュータは修正指標という助言はしてくれる）ができると

すれば、統計家は敬意をもって迎えられるでしょう。当面は、グラフィカル・モデリングなどを使って、有益な助言も出来そうです。この辺りは、今のところ芸術的な雰囲気も漂っていますが、その本質を統計学者に解明して頂きたいものです。そうすると、ますます統計家は住みやすくなりそうです。

ここまで来て、統計家は賢いコンピュータによって駆逐されるのではない事に気づきました。すべての人が自分の知識を必要な程度に統計モデル化することが可能になれば、統計家は不要になります。言い換えれば、全ての人々が統計家となる時代です。そのようになつたら、小生も旅人の視点を捨てて、もっと真面目に統計学に取り組みねばならないでしょう。

12.2 WWWによる統計科学情報の共有

1. はじめに

近年の計算機、インターネットの爆発的な普及に伴い、統計科学の教育環境・研究環境も様変わりしている。計算機の高性能化はパソコンでの高度統計計算、複雑な統計手法の利用を可能にし、そのための統計ソフトウェアも数多く販売されている。また、インターネットの普及は情報の取得・公開を従来とは比べものにならないほど容易にした。

このような流れの中で、多くの研究者が様々な情報をインターネット（中でも World Wide Web, 以下、WWW）を利用して公開している。その内容は、統計ソフトウェア（以下、統計ソフト）、統計教育用教材（以下、統計教材）、各種統計データ等と多様である。統計ソフトを作成・公開する目的は、自研究の成果を普及させるため。高価過ぎる市販ソフトの代わりに用いるため。市販ソフトではできない手法の利用のため等であり、統計教材を作成・公開する目的は、大人数での講義を効率よく行うため、いつでも、どこからでも利用可能にするため（遠隔教育）等があげられる。例えば、統計教材では、青木 繁伸氏（群馬大学）^[1] 等大変充実した内容の Web ページが散見される。これらの Web ページそれぞれは大変優れたものであるが、個別の取り組みだけでは自ずと限界はあろう。統計ソフトについてもまたしかりである。使用環境、目的にあった統計ソフトを作るには大変な労力を必要とし、個人ですべての手法を網羅することは不可能

宿久 洋（鹿児島大学理学部）

に近い。

一方、世界に目を向ければ、充実した個人の Web ページもさる事ながら、大学や研究グループによる取り組みが多い。例えば、UCLA (USA)^[2], Southwest Missouri State University (USA)^[3], Claremont College (USA)^[4], University of Alabama in Huntsville (USA)^[5], University of Strathclyde (UK)^[6], University of Newcastle (Australia)^[7] 等多くの大学で統計教材（オンラインテキスト）の制作・公開が行われている。統計ソフトについても、W. West 等による WebStat^[8], GASP^[9], D. Berger 等による WISE^[10], F. W. Young 等による ViSta^[11], A. DiCiaccio 等による StatEasy^[12], W. Hardle 等による XploRe^[13], J. Brown 等による EDGAR^[14], J. Banfield 等による Rweb^[15], J. Thioulouse 等による NetMul^[16], NWP Associate Inc. による STATLETS^[17] 等 研究グループでの取り組みが盛んである。紙面の都合で、個々の Web ページに関する詳しい説明は割愛させていただくが、これらの Web ページは大変充実したもので、どれも一見の価値がある。文末に URL を記載しておいたので興味のある方はご覧いただきたい。

話を日本に戻すと、日本でも研究グループでの取り組みがないわけではないが、例示した海外の Web ページのように網羅的な内容のものではなく、各自の研究あるいは教育に係わるものに限定されているよ

うに見受けられる。このような現状を踏まえ、以下では、今後の日本での取り組みを考える上で重要と思われる、統計ソフト、統計教材の共同開発及び共有の方法について私見を述べる。合わせて、現在、我々の研究グループが取り組んでいるプロジェクトについて紹介する。

2. 統計ソフト、統計教材の共同開発と共有

最初にお断りしておくが、以下の議論は個別の Web ページによる取り組みを否定するものではない。目的によっては、各自での取り組みの方が適している場合があることはいうまでもないことである。とはいえ、現在散見される統計科学に関する Web ページの目的には、多くの共通部分が含まれているのも事実であり、効率を考えた場合、共同開発は自然な選択である。

さて、公開・共有といっても方法は1つではないが、現状を考えれば、WWW を利用するという点については論を待たないだろう。よって、ここでは WWW を利用した公開、共有に絞って議論する。具体的な方法については、単なる（統計ソフト、統計教材）リンク集から集中管理型データベースまで色々な選択が考えられ、その内容（コンテンツ）の仕様についても、全く自由から完全統一まで多くの選択肢がある。

公開・共有の方法について、ここでは議論を単純にするため、Web 上に統合ページを作り、上述の情報（統計ソフト、統計教材）を公開する場合を考える。その際の公開方法を i) 分散管理型、ii) 集中管理型の2種類に区分して考えたい。仕様については a) 自由、b) ある程度の統一、c) 完全統一の3種類に区分して考えることにする。ここでいう分散管理型とは、複数の管理者（グループ）が個別にそれぞれのコンテンツを管理し、公開のみ統合して行うというものである。これに対し、集中管理型とは単一の管理者（グループ）がコンテンツを集中的に管理するものである。また、仕様とは、コンテンツ自体、動作環境、利用条件等のことである。

私は、ここで問題にしている「管理方法」「仕様の制限」がコンテンツの共同開発・共有を考える場合の最も重要な選択だと考えている。

表1に、方法、仕様と利便性の関係についてまとめておく。利用者の利便性、開発者の利便性については管理の方法には依存せず、仕様の統一性にも依存

し、互いに相反する関係にあると考えている。内容充実の容易性は開発者の利便性と一致するだろう。内容の信頼性は基本的に開発者に依存するものであるが、ここで評価しているのは、統合ページ管理者にとっての信頼性把握の容易さであり、それは管理の方法にのみ依存すると考えている。

表1. 管理方法、仕様と利便性

| | i) | | | ii) | | |
|----------|----|----|----|-----|----|----|
| | a) | b) | c) | a) | b) | c) |
| 利用者の利便性 | | | | | | |
| 開発者の利便性 | | | | | | × |
| 内容充実の容易性 | | | | | | × |
| 内容の信頼性把握 | | | | | | |

結論からいえば、どのような選択も一長一短である。しかし、開発主体を定めれば自ずと適した選択は限られると考えている。個人で開発する場合は集中管理になり、仕様も統一されるのが普通であろう。

ここで考えているのは共同開発の場合なので、結局は研究グループの規模に依存するといえよう。大人数のプロジェクトであれば、作り手よりも使い手の利便性を優先する余裕もあろうし、逆に、少人数による、あるテーマに特化したプロジェクトであれば、使い手にある程度の制限を甘受してもらうのは致し方なからう。

結局、あらゆる場合に最適なやり方はないという当たり前の結論にたどりつくわけである。これだけでは、あまりにも無責任な結論なので、まとめとして1つ提案させていただきたい。それは、本稿で議論している各種統計情報の共同開発、公開を学会として取り組んではどうかということである。統計学会の Web ページも更新され様々な記事が公開されているが、ここで議論しているような、ソフトウェア、教材、データ等の公開はなされていない。学会として、信頼性のある情報を公開することは大変意義深いことであり、積極的な検討に値する課題だと考えるが如何であろうか。

3. EBSA EBSA (統計科学のための電子書籍システム) プロジェクト^[18]の紹介

統計科学，中でもその理論に関わる書籍は年月の経過にも関わらず普遍的で有用な知見を有しているものが多い。しかしながら，多くが実際に利用されることなく入手不能な状態になっている。また，過去に出版された優れた教科書等も時代の流れの中で散逸してしまっている。一方，近年のネットワーク，情報の電子化技術の発展により，だれもが簡単に，情報の電子化，公開が可能な状況にある。

そこで本プロジェクトでは，著作権者等の協力を得，絶版で手に入らなくなった統計科学の理論及び応用に関する書籍を電子化し，広く社会に公開することにより，統計科学の一層の発展と実社会への普及を目的としている。各電子書籍は，元になる書籍のすべてのページをスキャナーで取り込み，画像処理を施し，PDF形式に変換したもの，及び，目次と索引をテキスト化したものからなる。PDF化することにより，ユーザは計算機やOS等の環境に依存することなく電子書籍を閲覧することができ，その一部あるいは全部をダウンロードし，紙へ印刷して閲覧することもできる。また，目次，索引のテキスト化により，キーワード検索が可能となり，目的の部分を瞬時に見つけることができる等，より高度な利用を可能にしている。なお，現時点での収録書籍一覧は表2のとおりである。

表2．電子書籍システム収録書籍一覧

| 書名 | 著者 | 出版社 | 発行年 |
|------------------------------------|--------------|-------------|-------|
| 因子分析法通論 | 浅野長一郎 | 共立出版 | 1972年 |
| 確率論及統計論 | 伏見康治 | 河出書房 | 1942年 |
| 実験計画法講義 I 基礎編(1) | 北川敏男 | 培風館 | 1955年 |
| 実験計画法講義 II 基礎編(2) | 北川敏男 | 培風館 | 1956年 |
| 質的情報の多変 量解析 | 松田紀之 | 朝倉書店 | 1988年 |
| 推計学への道 | 増山元三郎 | 東京大学 出版部 | 1950年 |
| 多変量解析論 | 塩谷実 浅野長一郎 | 共立出版 | 1967年 |
| 調査統計入門 - 単純任意抽出 法を中心として - | 船津好明 | 共立出版 | 1977年 |
| 調査の技術 | 浅井晃 | 日科技連 出版社 | 1992年 |

| | | | |
|-------------------------------|------|-------------|-------|
| 統計科学の三十 年 - わが師わが友 - | 北川敏男 | 共立出版 | 1969年 |
| 統計学の認識 基盤と方法 | 北川敏男 | 白揚社 | 1948年 |
| 21世紀の食 糧・農業 | 奥野忠一 | 東京大学 出版会 | 1975年 |
| 農業実験計画法 小史 | 奥野忠一 | 日科技連 出版社 | 1994年 |

これらの本の著者，著作権者の方及び出版社の方には，我々のプロジェクトに快く協力していただき大変感謝している。紙面をかりてお礼を申し上げたい。最後に，このプロジェクトの趣旨をご理解いただき，多くの方のご協力が得られることを切に希望している。

4．おわりに

今回のテーマは今後の統計科学の発展に大きく影響するものであると考えられ，学会としての前向きな議論が必要だと考えている。個人や研究グループでは成し得ない学会としての取り組みを期待しつつ筆を置くことにしたい。

- [1] <http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/lecture/>
 [2] <http://www.stat.ucla.edu/textbook/>
 [3] <http://www.psychstat.smsu.edu/multibook/mlt00.htm>
 [4] <http://acad.cgu.edu/wise/>
 [5] <http://www.math.uah.edu/~stat/>
 [6] <http://www.stams.strath.ac.uk/teaching/quercus.html>
 [7] <http://surfstat.newcastle.edu.au/surfstat/>
 [8] <http://www.stat.sc.edu/webstat/>
 [9] <http://www.stat.sc.edu/rsrch/gasp/>
 [10] <http://acad.cgu.edu/wise/appletsf.shtml>
 [11] <http://forrest.psych.unc.edu/vista/>
 [12] <http://space.tin.it/scuola/adiciacc/>
 [13] <http://www.xplore-stat.de/>
 [14] <http://www.jic.bbsrc.ac.uk/services/statistics/edgar.htm>
 [15] <http://pbil.univ-lyon1.fr/Rweb/>
 [16] <http://pbil.univ-lyon1.fr/ADE-4/NetMul.html>
 [17] <http://espse.ed.psu.edu/espse/hale/507Mat/statlets/statlets.htm>
 [18] <http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/~ebsa/>

13 海外研修記

13.1 アイルランド便りー統計教育事情ー

1999年8月から2000年3月までの8ヶ月間、大学から特別研究期間(サバティカル)の許可を得た。研究課題が日英大学生の地球規模における社会的危機意識の調査であったから、イギリスのロンドンに多くの研究期間を割り当てていたが、イギリス本土からアイルランド共和国の首都、ダブリンへ2ヶ月ほど University College Dublin (UCD) の SSRC (Social Science Research Center) の客員研究員としてお世話になった。UCD の SSRC は、この大学の社会科学系を統括するような研究組織であり、その中に社会科学関連の学部がすべて収まっていた。因みに、統計学科も理工系の学部ではなく、政治経済関連分野に属するらしく、この中に含まれていた。原則的に私は社会学科、社会政策学科の客員研究員であり、UCD の学生の危機意識、価値観を調査することになっていたが、隣の研究室が統計学科の研究室であったので、統計学科の教授と話し合う機会が多かった。ここでの統計学科といえば、もっぱら経済・社会統計の分野での研究が主体で、数学科の中の統計学という訳ではなかった。

教授の研究論文を見せてもらったが、驚くべきことに彼の関心は中学・高校の統計教育にあり、初等統計教育に対する思い入れに情熱が感じられた。アイルランド共和国は殆どイギリスと同じような教育システムであるから、アイルランドの中学・高等学校の統計教育の現状が分かれば、欧州全般の統計教育の動向が分かるはずである。ダブリンの高校から2名の数学の教員を紹介して頂き、教科書などを見せてもらいながらお話を伺った。日本の統計教育と事情は同じで、数学の中の「統計」の立場から逃れることができず、彼女たちの何とは無しの焦燥感が伝わった。

まず、アイルランドの共和国の教育システムについて若干説明しよう。6歳から12歳までの教育を First-Level School (Primary School) という。これは日本の小学校に相当する。カリキュラムも算数、国語(ゲール語)、英語、フランス語、歴史、地理、芸術、音

丸山 久美子(聖学院大学人文学部)

楽、図画工作、物理、社会 (Social and Environmental Studies) である。日本に比較すると教科に若干の特徴が見られる。12歳から17歳までを Second-Level School という。日本における中学校、高等学校に相当する。ただし、中学校 (Junior Cycle) は3年間、Senior Cycle は2年間である。つまり上手く行くと Second-level School は5年間で修了書がもらえる。至難の業の様であるが、17歳で Third-Level Education (University) に進学できる。だが、大学入学率は高々2%しかない。大学は総合大学が4つ (National University Ireland in Dublin (UCD), Cork, Galway, Nanyoath) の他に、Dublin University (Trinity College Dublin), The University of Limerick, Dublin City University である。尤も、アイルランド共和国の国土面積は日本の北海道を少し膨らませた程度で、人口は東京都の3分の1に満たない。今日、難民が増加したことにより、350万から370万に人口増加が喧伝されているが、それ程多い数ではなく、多寡が知れている上に、難民の受入態勢は厳しく、島国根性ともいべき狭隘な側面が垣間見える。

表面的には外国人に対する態度は円満で、一見宥和にみえるが、日本人と同じく外国人への何故とはない警戒心や偏見が強く頑固である。

話を統計教育に戻せば、コンピュータ、インターネットが普及し始めると、中等教育に「統計学」の取り込みが極めて希薄なことを危惧する向きが出てきた。歴史的伝統的に統計学を数学の一分科で、しかも理科系の大学へ入学する学生達が高校時代に統計学を学んでいる確率は低い。中学・高校の生徒は数学を学び、中学・高校の教員も伝統的な数学の教員であって、統計学を積極的に学ばせる意向を持つ必要はないのが現実である。これは、日本も全く同様である。入試科目の中に統計学がないからである。

ところで、データ・サイエンスたけなわの今日、データを読み解釈するには以下の3点が必要条件である。

- 1) 記述統計学と推測統計学を熟知していること
- 2) 計算の技術にたけていること
- 3) 統計的アイデアを理解していること

中学・高校の数学の教員は統計学を熟知し、データを読む訓練が出来ていない。ここに、現在新しいカリキュラムを円滑に教えることの出来る数学の教員を教育する教師や、様々な研究会での訓練が現場の数学の教員に課し与えられている。今年度、導入された教科書の内容は以下である。

1:exploring data, 2:exploring probability, 3:the art and techniques of simulation, 4:exploring surveys

13.2 プリンストン大学滞在記

1999年4月1日から2000年3月末日までの1年間、米国ニュージャージー州のプリンストン大学で海外研究に従事する機会に恵まれました。プリンストンを訪れるのは子供の頃から数えて今回が三度目でしたが、静かで美しいたたずまいは以前と変わらず、時の流れが止まったようでした。もっともニューヨークから車で1時間あまりと好位置にあるため周辺は急速に都市化しており、米国の好景気も手伝って、町を一步出るとあちこちにオフィスビルやショッピングセンターなどが建設中の状態だったことも事実です。大学自体も年々拡張を続けており、私の訪問中にも新しい建物が建設されていましたが、一向にキャンパスが狭くなったように感じないのは広大な敷地ゆえでしょうか。

今回の滞在で特に目立ったのが、米国社会におけるキャッシュレス化の進行とインターネットの普及です。スーパーマーケットでの買い物から電車の切符購入、宿泊料の支払いまで、現金よりクレジットカードの方がむしろ使いやすい仕組みが整っており、日常生活で現金を使うことはほとんどありません。また、インターネットの家庭への浸透度も日本とは比べものにならない規模です。昼夜を問わずインターネットを通して専門書の購入から航空券予約、長距離電話会社との契約・条件変更、オンラインバンキング等ができたことは、子連れ赴任の身には有り難い一語に尽きました。ハリケーンの影響で水道水の汚染が懸念されたときも、悪天候のた

and information from samples (data), 5:exploring measurement and multivariate analysis.

このように中等教育における数学それ自身の変革のために、教科書が書換えられ、1990年代から活発に統計学の教育が行われている。日本は教科書の改訂もままならぬ状況で、統計学の行方は極めて暗澹としたものといわざるをえない。数学の分野における統計学の役割は今日極めて重いものとなっている。この現状を十分に認識し、重く受けとめ、中学・高校のレベルで教科書の改訂を統計学会が進んで担うことが肝心であろう。

門間 麻紀 (東洋大学経済学部)

め子供の学校が休校になったときも、必要な情報をいち早く載せていたのは町のウェブサイトで、もはやインターネットは生活必需品となりつつあることを痛感しました。

プリンストン大学では経済学部の中にある econometrics research program に所属しました。経済学部では分野毎に様々なワークショップが開催されており、econometrics research program も例外ではありません。毎週のように各地から著名な学者を招いて計量経済セミナーが開催されていました。また、金融過程の研究で有名な A.R. Gallant 教授が客員教授として来校中で、講演を聴く機会に恵まれたことは幸運でした。正規のカリキュラム外でも教授陣と大学院生との間で様々な自主勉強会が催されており、その一つ、micro-econometrics reading group に参加して最新トピックに触れる機会を得られたこと、C. Sims 教授の講義を聴講できたこと、など学ぶことの多かった一年ですが、何といても有り難かったのが図書館の豊富な蔵書と豊かな読書スペースです。統計関係の本はキャンパス内数カ所に別れて存在していましたが、オンラインで所蔵場所、帯出の有無を調べ、必要な場合にはリコールをして受け取り場所を指定することができる仕組みになっており、大変使いやすいものでした。主要な学術雑誌もオンライン化されており、論文がいつでもどこでもすぐに印刷できるようになっていたことも非常に便利でした。

あつという間に過ぎ去った1年間ですが、徐々に米国の空気に触れ、私だけでなく同行した子供達にとっても大変貴重な体験になったものと確信しています。

14 日本学術会議関係

14.1 第18期日本学術会議会員について

第18期日本学術会議会員として、日本統計学会が推薦した松田芳郎氏が第3部の経済統計学領域の会員、吉村功氏が第4部の統計学領域の会員に選出されました。

14.2 会議報告

吉村 功

私の任期、第17期3年間はこの7月で終わります。これが最後の報告です。いつものことですが、私が注目した題材に焦点を絞って報告します。6月6日から9日にかけて、総会、部会、連合部会、各種委員会といった一連の会合が行われました。総会というのは会員210人の全体集会で、外部に発表する声明、報告書などが検討されます。今回比較的大きく取り上げられたのは常置委員会の改組と男女共同参画の推進のことでした。

常置委員会というのは、期を超えて継続している委員会で、7つあります。これを改組して6委員会とし、名前を番号でなく内容で表わすように変更になりました。そのときに焦点となったのが私の所属していた第2常置委員会でした。従来はこの委員会の仕事を、「学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上」としていたのですが、これを「学問の自由及び科学者の倫理・社会的貢献」と変更することになったのです。議論の焦点は、なぜ今「思想の自由、社会的責任」という表現を外さなければならないのかということでした。たとえば「思想の自由は憲法で保証されているからここで特に取り上げる必要がない」、「貢献という方が積極的前向きな表現だ」というような説明がなされましたが、腑に落ちないという顔の会員がかなりたくさんいたようです。

学術会議には、常置委員会の他に、やや臨時的な特別委員会があります。その一つが「女性科学者の

環境改善の推進特別委員会」です。ここで議論されたことを基にして、次の内容の声明を学術会議として出すことになりました。

- 1) 日本学術会議の自己改革に関する重点項目の一つとして、女性会員の比率を今後10年間で10%まで高めるという目標値を設定する。
- 2) 学術研究団体登録手続きの様式を改訂し、代表者の性別、及び会員・役員・会誌編集委員・論文審査委員等の総数並びに男女別数を会員推薦依頼時に公表する。
- 3) 会員推薦に関する学協会等への会長要請文書等に対して、どのような対応がなされたのかを調査し、公表する。
- 4) 研究連絡委員会の女性委員比率を高めるよう、更に努力する。

第18期の女性会員数は、この報告を書いている時点では詳細不明ですが、今期の2名より3倍以上に増えると予想されています。といっても、210名中の3%程度です。10%の目標を達成するには、各学会での積極的な方針が必要です。統計学研究連絡委員会にも現在は女性委員がいませんが、なんとか次期には、女性委員を推薦するようお願いします。

統計学研究連絡委員会は、数学研究連絡委員会及び科学教育研究連絡委員会と一緒に、「数学教育の改善をめざして」という表題のシンポジウムを3月24日に行いました。統計学研連からは、柳川堯、岸野洋久、大瀧慈の3氏に報告討論に参加していただきました。数学教育は統計教育とも大変関係が深いので、機会がありましたら、それぞれの方に感想や意見を尋ねてみて下さい。

従来は文部省が行っていた科学研究費補助の半分以上の部分が今年度から、学術振興会に移されています。学術振興会では、補助金の支出を今までより2ヶ月くらい早くして、5月頃から使えるようにしようとしています。その関係で、今年度は申請の時期が2ヶ月くらい

早くなるはずですが。会員の皆さんは、見逃さないことと、積極的に応募をされるようお願いいたします。科研費 総額は申請が多いと多くなる傾向がありますので。

15 博士論文・修士論文の紹介

[修士論文]

修士論文の紹介を以下の順で掲載します。

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------|
| 1) 氏名 | * 1) 徳重 修一(Shuichi Tokusige) |
| 2) 学位名 | 2) 修士(理学) |
| 3) 取得大学院名 | 3) 鹿児島大学理学部数理情報科学専攻 |
| 4) 論文タイトル | 4) 線形判別関数の頑健性 |
| 5) 主査名(指導教官) | 5) 稲田 浩一 |
| * 1) 蔵元 達志(Tatsusi Kuramoto) | * 1) 戸田 光一郎 |
| 2) 修士(理学) | 2) 修士(理学) |
| 3) 鹿児島大学理学部数理情報科学専攻 | 3) 鹿児島大学理学部数理情報科学専攻 |
| 4) 時系列解析における推測理論 ~自己回帰モデルについて~ | 4) U-統計量について |
| 5) 近藤 正男 | 5) 大和 元 |

16 2000・2001 年度評議員選挙結果

2000年6月30日、統計数理研究所において選挙管理委員、栗木哲、渡辺則生の両氏により開票が行われました。その結果、定員規定により下記の35名が2000・2001年度の評議員に選出されました(有権者1122名中、有効投票者数は196名、延べ記名数895、うち有効882、無効13、白票85)

青嶋誠、浅野長一郎、伊藤彰彦、伊藤孝一、伊藤聡、岩崎学、狩野裕、鎌倉稔成、川崎茂、栗木哲、小西貞則、佐藤学、杉山高一、鈴木和幸、瀬尾隆、竹村彰通、土屋隆裕、富沢貞男、中野純司、浜砂敬郎、平川孝三郎、

広津千尋、前園宣彦、松田芳郎、松縄規、丸山久美子、水田正弘、村上征勝、村上正康、森棟公夫、矢島美寛、山口和範、山本拓、美添泰人、渡辺美智子

17 第68回日本統計学会総会

(省略)

18 理事会報告

(省略)

19 会合案内

19.1 科研費『統計科学』基盤研究(A)によるシンポジウムのお知らせ

前理事会が発足した1998年8月に、科研費申請活性化ワーキンググループ(主査:馬場康維,委員:鎌倉稔成,栗木哲,富澤貞男)をつくり,いろいろな観点からの検討をしていただきました。そのさいに、『文部省科学研究費「統計科学」への申請のお願い』の記事も会報(N0.97/1998.9.20)に書いていただきました。この度,私が『統計科学』へ申請していた科研費,基盤研究(A)「統計学における理論と応用の総合的研究」(初年度1620万円)が認められました。いささかでも貢献できればと思い,多数の先生方の御協力をいただき,下記のようなシンポジウムを企画いたしました。講演者には旅費を配分しますので,詳しくはシンポジウム連絡先へお問い合わせ下さい。また,1日だけの研究会を何回か行う形式のシンポジウムもあります。続きの計画が確定しましたら,日本統計学会等のホームページに御案内いたします。

1 非線型時系列解析の研究

研究分担者:小西 貞則(九州大学)
谷口 正信(大阪大学)
日時:2001年2月15日~16日
場所:大阪大学待兼山会館(予定)
内容:研究者10名ほどに研究分担者が講演等を依頼する。
問合せ・連絡先:大阪大学 谷口 正信
e-mail: taniguti@sigmath.es.osaka-u.ac.jp

2 統計的 QOL 測定の信頼性と妥当性

研究分担者:丸山 久美子(聖学院大学)
杉山 高一(中央大学)
日時:2000年11月18日 他
場所:統計数理研究所
問合せ・連絡先:聖学院大学 丸山 久美子
e-mail: k_maruyama@seigakuin-univ.ac.jp

3 環境統計データ解析の研究

杉山 高一

研究分担者:清水 邦夫(慶應義塾大学)
佐藤 学(広島県立保健福祉大学)
日時:2000年11月21日~22日
場所:慶應義塾大学理工学部(矢上校舎)
問合せ・連絡先:慶應義塾大学 清水 邦夫
e-mail: shimizu@math.keio.ac.jp

4 統計学におけるインターネットの高度利用法の研究

研究分担者:中野 純司(統計数理研究所)
渡辺 美智子(東洋大学)
日時:2000年11月1日~2日(予定)
場所:立教大学立川記念会館特別会議室
問合せ・連絡先: 東洋大学 渡辺美智子
e-mail: michiko@hakusrv.toyo.ac.jp

5 データマイニングの研究

研究分担者:鎌倉 稔成(中央大学)
渡辺 則生(中央大学)
日時:未定
場所:未定
問合せ・連絡先: 中央大学 鎌倉稔成
e-mail: kamakura@indsys.chuo-u.ac.jp

6 多変量グラフィカル法の研究

研究分担者:佐藤 義治(北海道大学)
中西 寛子(成蹊大学)
日時:12月9日(土)他
場所:成蹊大学(予定)
内容:上記テーマに関する講演者を研究分担者により依頼します。
問合せ・連絡先:成蹊大学 中西 寛子
e-mail: nakanisi@econ.seikei.ac.jp

7 多変量解析と漸近理論に関する新展開

研究分担者:清水 良一(統計数理研究所)

藤越 康祝 (広島大学)

日時: 2000年10月26日~28日

場所: 広島大学理学部

問合せ・連絡先: 広島大学 藤越 康祝

e-mail: fuji@math.sci.hiroshima-u.ac.jp

8 計量ファイナンスの諸問題 (仮)

研究分担者: 高橋 一 (一橋大学)

国友 直人 (東京大学)

日時: 2001年1月9日~10日 (予定)

場所: 一橋大学国際企業研究科,

又は, 京都大学経済研究所

問合せ・連絡先: 一橋大学 高橋 一

e-mail: hajime@stat.hit-u.ac.jp

9 生物医学研究と新薬開発における統計学的論点

研究分担者: 折笠 秀樹 (富山医科薬科大学)

田中 豊 (岡山大学)

日時: 3月8日午後~3月9日

場所: 高志会館会議室

問合せ・連絡先: 富山医科薬科大学 折笠 秀樹

mail: horigasa@ms.toyama-mpu.ac.jp

19.2 その他の会議案内

2000年 10月

*7 - 9: 日本行動計量学会第 28 回大会 東京大学
教養学部 (駒場キャンパス)

*25 - 29: 12th International Conference on Domain
Decomposition Methods 千葉大学

*28: 日本品質管理学会第 30 回年次大会 明治大
学

*25 - 27: Bernoulli-RIKEN BSI 2000 Symposium
on Neural Networks and Learning, Ohkouchi Hall,
RIKEN (The Institute of Physical and Chemical
Research)

* 28 : Satellite Workshop 統計数理研究所

*10. 28 - 11. 1 : 第 7 回日中統計シンポジウム
国立オリンピック記念青少年総合センター (東
京)

2000年 11月

*17 : 日本信頼性学会第 13 回信頼性シンポジウ
ム 日本科学技術連盟

*11. 27 - 12. 1 : 第 5 回確率論的安全評価と管理
に関する国際会議 大阪国際会議場 (大阪市北区
中之島)

2000年 12月

*4 - 5: 日韓統計会議 B-Con Plaza (別府)

講演申し込み 2000年9月30日締め切り

<http://www.stat.ems.okayama-u.ac.jp/jkcs2000/>

*9 - 13: The Ninth International Workshop on
Matrices and Statistics In Celebration of C . R .
Rao 1s 80th Birthday Hyderabad, India

*19 - 21: International Conference on Statistics,
Combinatorics and Related Areas and the Seventh
International Conference of the Forum for
Interdisciplinary Mathematics

Indian Institute of Technology-Bombay,

Mumbai-400 076, INDIA

この会議では, 塩谷實先生の 75 歳の誕生日をお
祝いしての特別共通セッションとセレモニーの企
画があり, ぜひ多くの先生方にご出席していただ
ければと思います。

瀬尾 隆 (東京理科大) seo@rs.kagu.sut.ac.jp

2001年 7月

*15 - 19: 計量心理学国際大会(IMPS-2000)

大阪大学コンベンションセンター

<http://www.ir.rikkyo.ac.jp/imps2001/>

2001年 8月

*22 - 29: the 53rd Session of the International
Statistical Institute in Seoul

<http://www.nso.go.kr/isi2001/>

* ISI2001 サテライトミーティング

*20-21 : ISIS 2 (Industrial Statistics)

場所: 慶応義塾大学矢上新棟

Important dates:

2001年3月1日 アブストラクト締切

3月15日 採択通知

6月15日 原稿締切

広津千尋 hirotsu@ge.meisei-u.ac.jp

***30-31 : 情報社会のための統計に関する IAOS サ
テライトミーティング**

主催者： 総務庁統計局

後援： IAOS(International Association for Official
Statistics)

場所： 東京

テーマ： 「情報社会のための統計」をテーマとして、情報化の進展の動向に対応する統計、情報化が社会・経済に与える影響、統計の作成・利用における新しい情報技術の活用などについて議論する。

伊藤彰彦(財団法人日本統計協会理事長)

電話:03-5332-3151 ,FAX:03-5389-0691 ,

e-mail : ito@jstat.or.jp

***8.30-9.1 : 計算機統計学の最近の潮流と医学・生
物学への応用国際会議**

大阪大学コンベンションセンター

<http://www.jscs.or.jp/ICNCB/>

1. コンピュータ集約的統計解析法

2. データ・マイニングとその周辺
3. 樹木構造接近法
4. 臨床および医療評価過程
5. 遺伝子型または生物医学的特性のモデル構築と解析
6. 統計ソフトウェアの開発と評価
7. その他の議題

森 裕一 mori@soci.ous.ac.jp

岡山理科大学 総合情報学部 社会情報学科

***8.30-9.1 : 環境と健康:統計科学からの挑戦国際会
議** (International Conference on Statistical Challenges
in Environmental Health Problems)

開催場所：福岡市早良区百道浜，

福岡ソフトリサーチパーク

(<http://www.math.kyushu-u.ac.jp/ISCEP/>)

連絡先：〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

九州大学数理学研究院 柳川 堯

(yanagawa@math.kyushu-u.ac.jp)

Tel: 092-642-2765

20 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

9月号から編集担当が、渡辺美智子・瀬尾隆に替わりました。会員の方々にとって役立つ情報交換の場として、積極的に学会会報やホームページを利用していただければ幸いです。

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて 1,000 字以内をめどに原稿をお送りください。来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内(教官公募)なども受け付けております。また、修士・博士論文の紹介を行います。氏名(及び英文著者名)、学位名、取得大学名(専攻名まで)、論文タイトル(和文のときは、英文タイトルを併記)、主査名(または指導教官)をお送り下さい。

できるだけ e-mail による投稿をお願い致します。

原稿送付先：

〒112-8551 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学経済学部

渡辺 美智子 宛

Fax: 03-3817-1934

E-mail: kaiho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用 e-mail アドレス)

退会者

青柳俊昭, 坂野弘, 竹越春苗, 朝倉孝吉,

田中正光, 田中謙輔

現在の会員数(2000年8月10日現在)

名誉会員 24名

高齢者特別会員 9名

| | |
|------|--------|
| 正会員 | 1316 名 |
| 学生会員 | 171 名 |
| 総計 | 1520 名 |
| 賛助会員 | 22 法人 |
| 団体会員 | 3 団体 |

- ・統計関連学会ホームページ URL :
<http://www.jss.gr.jp>
- ・住所変更連絡用 e-mail アドレス:
jjusho@jss.gr.jp
- ・広報連絡用 e-mail アドレス:
kaiho@jss.gr.jp
- ・その他連絡用 e-mail アドレス:
jimu@jss.gr.jp